

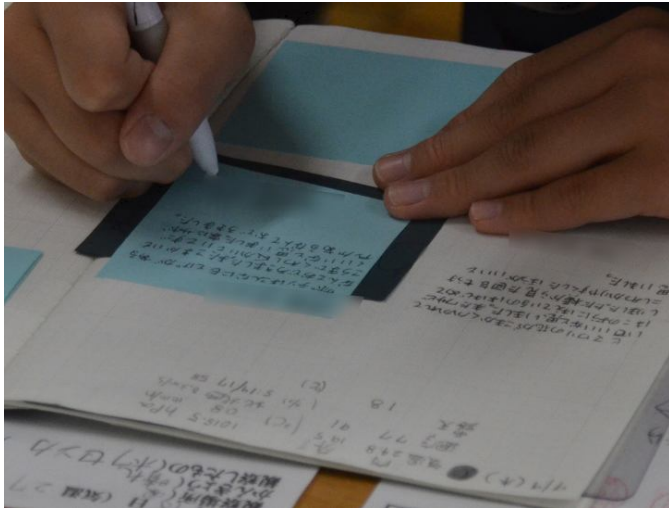
「カーボン紙の復権(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

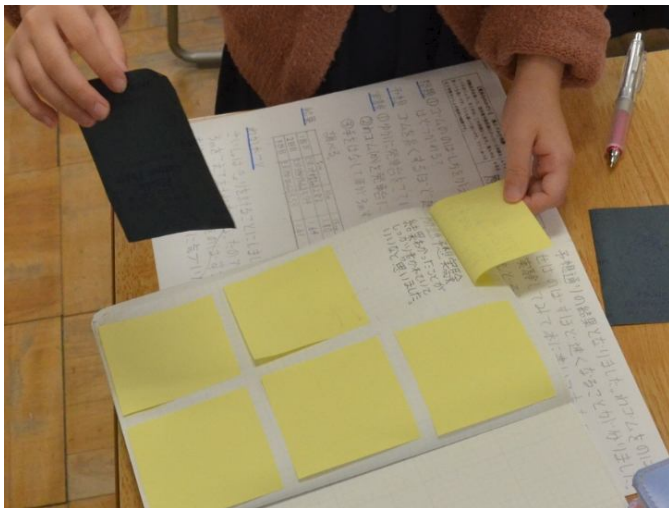
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

今は日常生活の中で、ほとんど使われなくなった「カーボン紙」だが、授業の中でのコメントの交換には非常に役立つ。クロムブックが超デジタルな道具なのに対し、カーボン紙は超アナログな道具と言える。



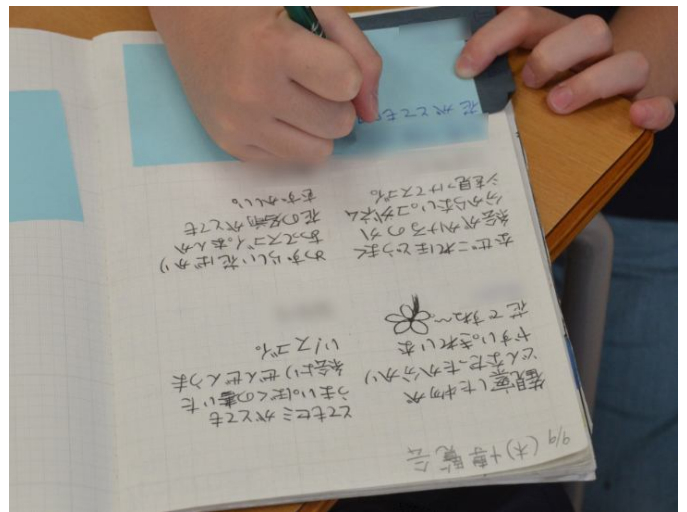
使い方は簡単で、ノートに貼った付箋紙とノートの紙の間にカーボン紙を挟んでコメントを書くだけである。必要なのはボールペンだ。このパイロット社製のカーボン紙の場合、使い捨てではなく、付箋紙30枚ぐらいいは使い続けることができる。



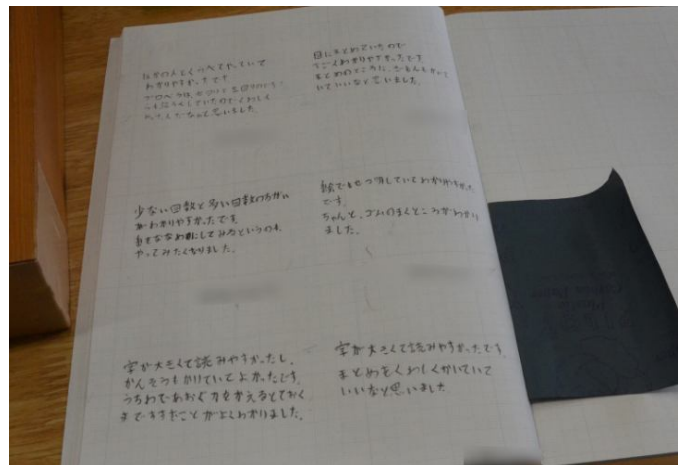
カーボン紙を使わないと、付箋紙はコメント先(相手)に渡ってしまい、自分の手元には残らない。しかしこの方法だと、カーボン紙の複写によって、相手に送ったコメントのすべてが自分のノートに残る。必然的に、コメントは丁寧になる。



もちろん付箋紙のコメントは、相手の作品の机上に残す。その付箋紙は、コメント先の子どものノートにそのまま貼られる。



ノート1ページには、付箋紙6枚分のコメントを残せる。大切なのは、付箋紙の一番上(うらのりの部分)に「自分(コメントを書く子ども)の名前」、一番下に相手の名前を書くことだ。そうしないと、相手の名前が自分のノートに残らないのだ。



1時間の活動で、だいたい10人ぐらいにコメントを書ける。もらうコメントも10人前後だ。これは、自分の学びの振り返りに役立つと思う。